

大地

第 31 号
2009. 5. 1. 発行
浄 國 寺
上越市町3丁目14-10
☎025-523-5724

俳句十句

山崎 睦

春うれし雪の高田に住めばこそ
沈香の香り残りて初灯り
九十四老いしおのれを頼みおり
大寒やマスクほつほつ花粉症
ヨーグルトかけ冬苺淡き紅
コーヒーにワイングラスや春の宵
水枯れの池春の陽に底さらし
寒がりの犬炬燵より顔を出し
佐渡隠し能登を隠して冬の波
散る紅葉流して昏るる青田川

小さな居酒屋で飲む

山崎隆昌

去年、冷たい雨の降る十一月の終り、親しい仲間五人と高田仲町の小さな居酒屋で飲む機会があった。

年齢もキャリアもバラバラで、住む場所も新潟、栃尾、高田、新井と県内それぞれだ。共通項は老人福祉に関係していること。

気心の知れた仲間で、さしたる目的もなくただ飲みかつ話をしたというだけの集まり。

五人の中には、日ごろは健康管理に厳しい若い管理栄養士もいたが、彼女も含め大いに飲み食った。(二時間飲み放題のメニュー)

温かい鍋をつつきながら、心地よい酔いにまかせ取りとめない話を続けたことが何よりも楽しかった。

話題の一つは藤沢周平のこと。『蟬しぐれ』や『用心棒シリーズ』さらに『橋ものがたり』『三屋清左衛門残日録』等々の作品について、その思い入れを語り、それぞれがささやかな知識を総動員して「周平論」を論じた。話の内容は支離滅裂、すじも彼方此方と跳びまわる。しかし最後はいたって単純に「藤沢周平はいいよなあ」となり、そこからまた懲りもせずに「周平談義」が始められる。

周平の武家ものの舞台は庄内海坂藩(現在

の鶴岡市がモデル)。我が妻の実家が同じ庄内の酒田ということもあり、僕自身周平の作品により親しみや近いものを感じるのかもしれない。

どの作品も良いが、早春の光の中、「平八が、やっと歩く習練をはじめたぞ」の台詞で終わる『三屋清左衛門残日録』が一番好きで繰り返し読んでいます。この作品はテレビ化された。「日残りテ昏ルニ未遠シ」の字幕で始まる本シリーズはテレビドラマとしても秀逸であった。(主演は仲代達矢)

物忘れが一段と進化したこともあり、同じ作品を繰り返し読んでも新鮮そのもの、その度に「藤沢周平はいいなあ」と思い「人間も捨てたものではないぞ」と思うのは重宝だ。

ところで藤沢周平作品には酒を飲む場面が多く出てくる。それも高級料理の見世ではなく場末の居酒屋か小料理屋が舞台。そこでは登場人物が気心の知れた仲間と、さしたる目的もなくただ飲みかつ話を楽しむのだ。

高田仲町の居酒屋を舞台に長々と続いた我らの「周平談義」も落ち着くところ「仲間と居酒屋で飲む酒は旨い」であった。



ハイジ姉さん

山崎 慎子

庭の一角に、祖父隆英の歌碑が建っている。寺報「大地」の名前の元ともなった

つく土筆生きむ願ひのひとすじに
大地を割りて伸び出にけり

という歌が父武雄の筆により刻まれている。そして、その前方に高さ三〇cm程の石が置かれ、回りをブロックでささやかに整備してある。庭の中でみつけたただの石である。

あえて標記はしていないが、この石の下には十年前に死んだ黒いラブラドル犬、ハイジのお骨が埋められているのだ。

ハイジが我が家で暮らしたのは、わずか三年足らずであったのだが、死んでしまったのは十六歳を少しまわっていた。それには次のような理由があった。

ハイジは盲導犬として、小国町在住の中村良子さんの良きパートナーを、十一年余り勤めたのだった。私達の役割は、退役盲導犬の看取りボランティア、ということにでもなるうか。しかしハイジを引き取ったのは、ごくごく軽い気持ちからで、世話するなどという殊勝な気持ちは、更々なかったのである。子供達も皆、家を離れてしまう心もとなさと、盲導犬をしていた犬ならば、さぞお利口であ

ろうという打算がはたらいてのことだった。そして彼女はその期待を裏切ることのない、あらゆる意味で一級の犬だった。

つやつやした漆黒の毛並み、アーモンド型の目。その目は我が家に来たとき既に白濁して白内障におかされていた。慣れない初めの頃、電柱にぶつかったり、溝に足を落としたりといったことがしばしば起きた。暫くすると道を覚え、私達にも慣れて、ハンディを克服したのである。見えない人の介助をすることに献身し、やがて自分自身も見えなくなつて退役を余儀なくされ、大切なパートナーと別れ、全く見知らぬ土地、昨日まで会ったこともなかった私達に引き取られたハイジ。その心の中はどのようなだろうと、度々思ったものである。今でも家族が集う時、しばしばハイジの想い出話になることがある。子供達はそんな時、時に尊敬をこめて「ハイジ姉さん」と呼ぶことがある。そう呼ばずにはいられないものがハイジには備わっていた。

我が家に来た当初、散歩の道すがら拾い食いをしたことがあった。良い気分朝の空気を楽しんでいた私は、その姿を浅ましいと思つてしまった。また拾い食いを許せば、思わぬ事故にあうこともあり得る。腹立つまゝ私はハイジをひどく叱った。首をたれて、すぐのごと歩きだしたハイジがあわねだった。けれどハイジはそれ以来、たとえ散歩の相手が誰

であろうと、ただの一度も拾い食いをしたことはなかった。

家の中では首輪もつけず、鎖につなぐこともせずに暮らした。夫が首輪を嫌ったからである。台所に入っていけないことを教えれば敷居の所に踏み止まり、ヨシというまで台所に入ることは決してしなかった。

また家に来て間もなくの頃、茶の間のテーブルに、芋の煮っころがしを丼に入れたまゝ、急な来客に慌て、出てしまった時、残っていた芋を全部食べてしまったことがあった。こちらの落ち度にも拘わらずハイジは叱られ、そしてその後は、一晩中テーブルに食べ物が置き去りにされていたとしても（茶の間はハイジの居間でもあったのに）決して食べたりはしなかったのである。

ことほど左様に学習能力の極めて高い賢いハイジは、二年程をつつがなく過ごしてから徐々に老化が進んで行った。そしてやゝ認知症の傾向もあつたのか、その頃になるとヨタヨタした足取りで、部屋を抜け出し家の中をさまようことがあつた。あれはもしかしたら、最も懐かしい、かけがえのない存在であつた中村さんの姿を、捜し求めていたのかもしれない。そしてついに寝たきりになつたのだ。が、そんな状態になつても排泄は外に出ることを求め、私達は重い身体を抱えて外に連れ出した。時には帆布で担架のようなモノを作

ることを試みたりもした。

「ハイジ、ワン、ツーしてもいいよ」

と言っても、排泄の失敗はほんの数回だったと思う。また後ろ足の付け根近くの床ズレは気が付いた時には既に赤くただれて、一日二度の手当に母と二人、一時間程を費やすことも常のことだった。

痛いともいわず、辛いともいわず、横たわりながら時折前足を動かしていたのは、中村さんのパートナーとして働いていた頃の夢を見ていたのだろうか。そんな風に次第に衰えが進み、三カ月近く経った十一月四日静かに息をひきとったのである。

ハイジの亡きがらは夫と二人、当時能生町の奥の少し小高い所にあった犬猫の火葬場で焼いてもらい、翌日骨になったハイジを受け取りにいったのだった。一部は中村さんにお返しして、あとは庭に埋めてやった。

今はその後やって来たワン公達を、時折その前に連れて行って、

「ハイジ姉さんが入っているんだよ、お利口な、お利口なワンちゃんだったよ」と話かけたりしている。

あれからもう十年が過ぎた。どちらかといえば動物が苦手だった私に、豊かな時間を与えてくれたハイジ。(その証拠に、何と今我が家には二匹の犬が住んでいる!)
折にふれて誇り高かったハイジのことを想

い出し、また語り伝えていこうと思っている。

※《盲導犬の存在》

生まれて間もなく親犬から離れてパピーウォーカーに一年だけ預けらる。その後、訓練施設で厳しい訓練を受ける。その中から適性に優れた犬だけが、目の不自由な人のパートナーとなって働く。

平均的には九歳〜十歳位で引退をし、老犬施設か私達のような人に引き取られて余生を過ごす。

盲導犬の一生はとても誇り高いが、過酷であり、それを思うとやるせない。そしてそれ以上に有り難い存在である。

十年の月日

さいたま市 相馬 郁子

一九九七年の十月、不況のあおりを受けて、私の家は靴屋を廃業しました。

嫁いで三十三年目、それまで商売をやめるなんて考えてみたこともありませんでした。いたる所に積まれていた靴がなくなり、ガラーンとした倉庫棚を見た時は、これからどうなるかしらと心配と不安で途方に暮れました。

会社を閉めるのは想像以上に大変なことでした。工場の機械、靴の整理、長年勤めてくれた社員たちの退職、最後に住み慣れた土地家屋を売却し負債の返済に充てました。これからの生活を考えると自然に涙が出てしまいました。でも生きなければなりません。私は悪かった足を手術し、半年後に就職、主人は一足早く就職したのですが十か月で病気になり、心臓病の手術を受けました。

でも人間ってたくましいものです。私たちはさいたま市に小さなアパートを借り、私は仕事をし、ようやく十年が過ぎました。現在、私も昨年で仕事をやめ、主人と二人年金生活です。生活に余裕などありません。

しかし、こんなにも静かな生活があったのかと思うほど、楽でもったいないような日々が過ぎていきます。すべてを削ぎ落とした生活は、野菜の葉一枚、ひとかけらの肉、一枚のティッシュも大事に使うようになりました。もの大切さを再認識させてくれたご縁に感謝の心いっぱい。昨今です。そして、この静かな生活が続きますように願っているこのごろです。

※筆者は前任職武雄の次女、この文は、平成十九年十月十六日付けの読売新聞『女の気持ち』欄に掲載されたものを、筆者の諒解を得て転載いたしました。

私のなつかしいお年寄り達

大町四 渡辺 正江

長い間商売をして居て沢山の人達とお会いして来た。店頭で又は配達時の僅かな時間。断片的ではあるけれども時間を共有し過ぎたお年寄り達の思い出です。

寺町のSさん、幼少より足が不自由な方。「僕はね二度目のハレー彗星を今度見られるんだよ。小学生の頃駅の隣の屋根の上に大きく光る長い尾を引いた星があるんだ。明日ぶつかるといふ日学校の庭で遊ぶ友達を教室の窓から見乍ら、もしかしたら僕もみんなも明日は居なくなるのかなと思ってみたよ。何も起こらなかつたけどね」

ベレー帽の英語の先生。「夏休みに直江津まで泳ぎに行つての帰り道給水を飲もうか、歩いて帰ろうか、お金は片道分しか残ってないし、いつもいつも迷つていつも給水だったよ」

常にソフト帽姿の長身のUさん。毎夕注文の品を取りに見える。ある風の強い日、帽子を手に入つてこられた。

「ワーツ、お茶の水博士だ。良く似合う」真つ白なフサフサの毛が耳のうしろまでぐるり。アトムの子の親の博士そのもの。騒ぐ私を見て、ポンと帽子を頭に乗せて以後見せ

てもらつた事は無い。

肺炎で入院された。好きな物を持って顔を見に行く度に表情が無くなつて行く。病院の食事を受け付けられないらしい。皆一律の老人扱い手間を省くためのオムツ、ハンガーストライキで逝くのを早めたと思つている。

Kじいちゃん。三十年を超え一人住まいのベテラン。九十歳を過ぎて、さすがに何かと心細くなりよくお呼びがかかる。

今日は少し違う様子、今度こそダメかも、明日は目が覚めないかもしれないと思ふことも、でも基本的に達者なので気にもせず、ある日「写真でもそろそろ用意するかね」と言う。「何のこと？」キョトンとした様子。

『十分に生きた、いつ逝つても良い。でも今日でなくとも良い』という言葉思い出した。画家のHさん。配達に行つたら突然「私が絵を教えてあげましょう」と言われる。奥さんを亡くされて寂しそうな頃で、イヤとは言えない。水曜日夜七時（遅刻はダメ）玄関で待つておられる。熱心に教えて頂いて一年半ほどの秋口に、おやつアイスプリンを持参したら「初めて食べた、これがプリンか」と言われビックリ！。その数日後「風邪を引いた、暫くお休み」との電話を頂いてそれきり。初めてのあの冷たいプリンが悪かったのかとしばらく後悔する。

その後、Hさんの家は取り壊された。あの素

晴らしい大きな絵はどうなったのでしょうか。

「家内と一緒に日に、愛猫もどこかへ行つてしまった」「判るんだね」と話すSさん。私に「魚の焼き方を教えてくれ」と言われて切なかつた。男の人が残るのは可哀想。

とびきり良い名前の鶴松さん。冬は綿入りもんで散歩。ある日お堀に向かつてもんぺを引き下げオシッコする姿を発見。後日「ダメでしょ、あんな寒い日にチンポ凍るよ」と言う私に、口をスポめて「ムフフフ」。小さくて可愛いおじいちゃんだった。

皆さんは、私の知らない所でいろいろ有つたと思うけれど、共通しているのはクヨクヨしていないこと、それに「ありがとう」も良く聞いた。

ところで、人に会い話しをして、別れてから「アツ私ばかりおしゃべりして」といつも思うのだが、私は居なくなつた後、懐かしく思い出してもらるのであろうか。

後記

爽やかな初夏の風が吹く季節です。「大地」三十一号をお届けします。

坂村真民の短い詩に『時』があります。

悲しい時は／風と共に／走れ

嬉しい時は／花と共に／舞え

人々は悲しみや喜びを抱えながら生きる。そして心の中の風や花と共に（隆）